
ハルヒSS ハルヒ「セックスやってみようぜ」

metalika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルヒSS ハルヒ「セックスやってみようぜ」

【Nコード】

N5926R

【作者名】

metalika

【あらすじ】

ハルヒが男の娘になってキヨンとセックスするまで

小学生のキヨン、谷口

キヨンはこの街で一番高いホテルを見上げていた。

「なあ、あんなホテル行ってみたくない？最高の美女と一緒にさ。」

「ああ、いけたらいいな。」

谷口が投げやりに返事を返す。

「なんだよ、夢がねえな。」

「おもちゃ屋の三男坊だぜ、俺は。」

「おもちゃ屋なら夢持とうぜ、子供達に夢を与える仕事じゃね？」

「いいや、夢や希望なんていう現実から眼を逸らさせる仕事だ。

まあ、そもそも家業なんて三男坊には関係ないよ。」

「じゃあさ、俺と一緒にでかい事しようぜ。ビッグマネー掴んでさ、この退屈な日常から抜け出すんだ。」

「でかいことねえ。まあとりあえず、自分の店が欲しいな。おもちゃ屋。兄貴が店継いだら、その隣におもちゃ屋立てるんだ。品揃えも値段も兄貴のとこより良くして、それで店潰したい。」

「お前、お兄さんの事嫌いなのか？」

「はっ。お前それ全国の三男坊や次男坊に聞いてみるよ。」

谷口は笑う。

「殺したい、死ねばいい、生まれてこなければよかったのに。」
キヨンも笑う。

どこか悲しみの混じった笑い声が、この場を制圧していた。

キヨンとキヨンの兄が喫茶店で話している。

兄の友人がキヨンの体を買いたいという事で、その話を兄がキヨンに話していたのだ。

利益の半分はマージンとして兄が貰う事になっている。

「なあ、キヨン。お前は次男の癖に学費を親に肩代わりしてもらってるんだぞ。」

「ああ。そうだな。」

「てめえつ。」

兄がキヨンの髪を掴むが、なんとか苛立ちを抑える。

「これから仕事だつてのに、面を汚しちゃうぞいな。」

「かまやしないよ、俺はそんな力マみたいな真似する気はない。」

兄がキヨンの頭をテーブルに叩きつける。

「長兄の言う事が聞けないのか？」

「俺はこれでも次男だぜ。一家の面に傷はつけられない。」

警防ででキヨンの顔を叩く。

「喧嘩なら買わせて貰うぜ。」

「これは駄だよ。」

「つまんねえ、つまんねえなあ兄さん。どこの家でも長男つてのは玉を抜かれちまうもんかい？」

兄は更なる攻撃をキヨンに銜えたいが、なんとか抑えた。本当に喧嘩という事になってしまえば、殺されてしまう可能性が高いからだ。

喫茶店に悪趣味なスーツを着た大柄な男が、柄の悪い男達を従え入ってくる。

兄の友人だ。

「ヒュー。やっぱりかわいい面してるぜ、こいつはあ。」

「悪いな、こいつ今なんかしぶってて。」

「そんなに安い男じゃないってか。じゃあちよっと色をつけよう。」

兄の友人が懷から札束を出し、兄弟の間に置く。

キヨンが札束に口の中の血を吐きかける。

「てめえっ。」

兄が警防をキヨンの頭部に振り下ろす。

「くくくっ。君のそんな所が俺をそらせるんだよ。」

友人が指をぱちんと鳴らすと、付きの男達がキヨンを捕獲しようとする。

キヨンは一本のナイフで、男達と渡り合う。

キヨン達の後方から銃撃音が鳴る。

男達は急所を狙い打ちされており、すぐには動けない。

キヨンは走り出す。

「助かったよ。」

キヨンは古泉と谷口と共に、走って逃げ出す。

「姫のピンチに王子が現れるのは基本ですよ。」

「ホモから逃げてもまたホモか。大変だなお前も。」

谷口は走りながらそう言って笑う。

キヨンも笑い出す。谷口も苦笑する。

ハルヒやキヨン達が学校の屋上でたむろしていた。

キヨンは手すりに持たれかかり、ホテルの最上階のレストランを見上げる。

この街で一番高い建物だ。

谷口「またそんなもん見上げてるのかよ。好きだねえ。」

「至極一般的な男子高校生の願望さ。」

「俺さ、ハルヒや古泉、長門に会って、このつまらない日常が変わると思ってたんだ。」

でも変わってない。俺は昔と同じように、あのホテルを見上げてる。」

谷口「そんなもんだろ。長門はクローンだからなんだかしらねえけど、能力は対したことないし。」

「僕も超能力者といっても、閉鎖空間以外では殆ど力を発揮できませんからね。」

古泉は超能力でシャーペンを曲げる。

「ハルヒの能力もな。世界が滅んでも俺は損するだけだし、例えばメガロドンが神戸に出没したとしても、そんなもの解決すればそれでお終いだ。」

「何か楽しい事ないものかしら。ねえ、ユキ。」

「この本なんてどう？」

「そんなことじゃなくてさ。」

みくる「ふにや。。。zzzz」

「みくるちゃんも寝ちゃったし。」

「もうスモークチーズも食べちゃったによる。」

皆帰り支度を始める。

校門にて。

「今日はなんだか飲み足りないんですよ。」

古泉がキヨンを見つめて言う。

「帰って一人で死ぬまで飲んでろ。」

「まあそう言うなよ。今日はもうちょっと飲むか。」

谷口が間に入る。

「俺そんなに金ないぞ。」

「僕の家に来ますか？」

「俺の家にしよう。」

こいつの部屋なぞどんな仕掛けがあるか解らない。

ハルヒがキヨンを見つめている。

何か言いたげだが、声はでない。

言いたい事を変えて、口を開く。

「はしたない女の子って嫌われるかな」

「私の脳に蓄積したデータから言えば、嫌われる確立が（ry」

「帰りましょうか。」

みくるが優しいに言う。

「あのさ、俺邪魔？」

谷口が居心地が悪そうに言う。

「いや、来てくれ。」

こいつと部屋で2人きりなんて貞操の危機だ。

深夜

谷口「古泉、あんまり飲まないな。」

「ええ、僕は緊急でバイトが入る事が多いですから。」

「お前も大変だな。」

谷口はそう言いながら国産の安ウイスキーを飲む。

「俺等は金ないけど、アルコールが体内にある間は楽園にいるみたいだ。」

キヨン「そうだなあ。しかし楽園ってのは刺激が少なくてよくない。生憎俺等はクリちゃんだ。」

楽園に足を踏み入れても、美女の大群が見えてこない。」

「宗教によつては、酔うとハーレムが見えるもんなのかね。」

「そういうもんなんじゃねえの。たまんねえな。」

キヨン「でもほんと、このままどうするんだろうな。」

俺は勉学に励むわけでもなく、親に学費を肩代わりしてもらってる身分だ。

入学する時、当初はもっと働くつもりだった。だがSOS団に入部してからというものの、ろくに働いていない。

「さあ、辞めちまおうか、高校なんて。」

谷口は投げやりに言う。彼もまた、似たり寄ったりな状況であった。

「大体、おかしくないですか。仕事とある高校に通うことになったら、その学費ぐらい経費で出すべきじゃないですか。」

古泉は苛立ち、いつもの微笑みは消えかかっていた。

彼のいつもの性格は、演技でしかない。

そんな素の古泉を見て、キヨンは少し微笑む。

谷口「その学費は古泉が出してるのか？」

「いや、会社に出してもらってます。その代わり給料なしですよ。じゃあ生活費はどうしろと？」

谷口「ふうん、じゃあ生活費は別に稼ぐしかないわけか。」

「それも難しいですね、いつも急の仕事が入る。」

キヨン「金かあ。」

谷口「何とかしないとなあ。」

キヨン「何とかしないとな。」

谷口「で、いつもそう言って終わるんだよな。」

谷口はケタケタと笑う。

「ハハハ。」

キヨンも笑う。

古泉だけは不機嫌そうだ。

だが、そんな友人達の姿を見て、多少心が和む。

騒音が古泉達の下に届く。

彼等には聞きなれた音だ。

「仕事ですね。今日はこれで失礼しますよ。」

キヨン「おい古泉、大丈夫なのか。お前今日はちょっと飲みすぎて

――」

「行かなかつたら消されますから。」

古泉はそう言い、部屋を出ていった。

「あいつ今日は随分酔ってるぞ、1人で行かせて大丈夫か？」

谷口が立ち上がり言う。

「俺等が行っても邪魔になっちまう。ここにいた方がいい。」

「そうか。」

翌日教室

だるそうにキヨンと古泉、谷口が教室に入ってくる。

谷口は昨日そのままキヨンの部屋で寝たので、そのままキヨンと登校してきた。

途中古泉と会い、3人で登校してきた。

キヨンの後頭部に衝撃が走る。

「おつす、朝はもうちょっと気合いれるよ。」

痛い。。誰だ？

俺が後ろを振り向くと、ハルヒに似た男子生徒が立っていた。

背丈はハルヒより少し高いぐらい、華奢で小柄でしいうなら可愛い男の娘verハルヒだ。

ハルヒ「俺だけ仲間はずれはないだろ。」

「えっと、もしかしてハルヒ？」

「なんだよ、俺の顔を忘れたのか？」

どうやら本当にハルヒらしい。

「ああ、ちょっと寝ぼけてて、悪いな。」

俺は適当に会話を取り繕い、古泉の首根っこを掴んで廊下に行く。

「ああ、キョン君から僕を求めてくれるなんて。」

廊下

「あのさあ古泉、ハルヒは女だったように思うんだけど。」

「ええ、昨日までは女生徒でしたね。」

「またハルヒの不思議な力か？」

「でしょうね。これはきつと、彼女の望む姿になったのでしょう。」

「

「あいつ男になりたかったのか？」

「鈍感ですね。僕の気持ちは理解してくれているのに。」

「？」

「ハルヒさんは貴方の事が好きだったんですよ。だからもつと一緒にいたい。でも女である手前、そのようにもいかない。」

「それで、男になってもつと俺と一緒にいたいと？」

「ええ。貴方に気に入られたいからでしょうね、外見はとても可愛らしい、女性のような、男の娘って奴ですね。」

貴方が普通の男の体に興味はないということぐらい、僕等のやり取りを見て知ってるでしょうからね。」

「どうです？男の娘ハルヒさんは。」

「ハルヒにチンポがついたというのは違和感があるが、まあいいか。」

「

着替え中

ハルヒが教室で着替え始める。

俺や古泉はどうにも気まずい。

クラスの男子達は皆じろじろとハルヒの着替えを見る。

しかし、ハルヒが変化したというような意識は彼等にはないようだ。

以前からハルヒが男の娘だというように頭の中が書き換えられているらしい。

ハルヒ「なんだよ、じろじろ見やがって。気持ち悪い。」

クラスメイト「いやだって、なあ。」「ああ、正直たまらない」

「俺の体を見ていいのはキヨンだけだ。なあキヨン。」

「え？」

キヨンはハルヒに手を引っ張られ、トイレの個室に2人で入ることになった。」

ハルヒが着替えようとする。

「ここで着替えるのか？」

「当然だろ？あんなにじろじろ見られたんじゃ、気持ち悪くて仕方がない。」

「まあそりやそうだろうが、なんで俺まで同じ個室に入ってるんだ？」

「細かい事言うなよ。お前もとっとと着替えろ。」

「ああ、まあいいか。」

あまり気をつかうのも変なので、俺はハルヒと2人、狭い個室の中で体操服に着替え始める。

といいつつ、見る。やはり見てしまう。まあ昨日の今日で急に男の娘になっていたという不思議からも来るのだが、

それを除いてもまじまじと見てしまうぐらい、今のハルヒの体には魅力があった。

その視線を察し、キヨンはにかむ。

「へへ。」

ちつくしう、かわいいじゃないかハルヒの癖に。

部室が揺れる。

「おわっ、朝比奈さん、長門、大丈夫か？」

みくると長門はなんとか机の下に隠れて身を守っている。
揺れが収まる。

「お前等大丈夫か？」

「はいー、頭打ちでしたが。」「大丈夫。」

「はは、朝比奈さんらしいですね。」

「笑わないで下さいー。」

皆無事だったようだ。

ハルヒは若干拗ねていた。

大方自分だけ心配されなかったのが不満なんだろう。

「別に、俺はこう見えても男だからな。」

やはりちよつと拗ねている。

男の娘になったのだから、どう接していいのか、少しやりづらい。

キョンはTVをつける。

どうやらここから離れたとある地域で地震が起こったらしい。

被害は盛大だ。

逃げ惑う人達、壊れていく街の姿がTVに映し出されている。

俺が子供の頃に起きた大規模な地震の事を思い出す。

俺はふと考える。

ここに毛布や水、食料等を持っていけば高く売れるんじゃないか？

「SOS団の出番ね！」

「ああ、団長。」

「これはきつと地底怪獣のしわざよ。」

俺はハルヒから目を逸らす。

谷口が血相を変えて部室に飛び込んでくる。

「ああ、お前等無事だったか。それでな。チャンスだと思わねえか？」

「ああ、チャンスだな。」

ハルヒ「SOS団の名を全国に知らしめるためのな！」

「いや、ビジネスチャンスだよ。」

「ええ？これから地底怪獣と闘いにいくんじゃないのか？」

「それはまた落ち着いてから探そう。で、お前来るのか？」

「ああ、まあいいや、とりあえず俺も行くよ。」

古泉、お前も来いよと言いたいけど・・・仕事があるか」

「いえ、僕も行かせて貰います。大体、給料もまともに出せない組織が悪いんです。こんなチャンス逃すわけにはいきません。」

「よっしゃ、決まりだな。」

俺達は水や食料、医療品、毛布等を買い込み、4台の車で被災地に向かった。

被災地は悲惨を極めていた。

値段を書いたダンボールを車に貼り付け、スピーカーで宣伝する。

万札を叩き、毛布や水を買っていく者もいる。笑いが止まらない。

寒さに震えている少女をつれた少年が、谷口に近寄り、千円札を何枚出す。

「すいません、妹が津波で随分冷えちゃって。これで毛布譲ってくれませんか？」

「算数と文字の読み書きぐらい勉強しとけよ坊主。」

少年は下を俯く。

「酷いお兄ちゃんだね。でも僕は優しいから、大サービス。」

少年は期待を持ち、古泉を見つめる。

古泉はポケットから飴玉を1つ取り出し、少年の手のひらに置く。

「お金はいらないよ。」

谷口「その金は算数習うのにとつときな、H A H A H A !」

「兄ちゃん、こりやちよつと高すぎる。」「それでも人間かお前等。」

古泉「すみませんねえ。泣き言ならこうして無料で聞いてあげますが。」

「こいつらやつちまえ!」「そうだ、こいつら殺して全部奪つちまおう!」

「うぉー!」

暴徒と化した一部の下劣な輩が、キヨン達を襲う。

襲い掛かってきた者達に、キヨンがショットガンを頭部に放つ。

下劣な輩の頭が吹き飛ぶ。

「ほらハルヒ、何してるんだ。早く撃て。こいつらは人間のクズだ、殺しても構わない。」

「そ、そうだな。」

ハルヒもクズどもにショットガンを撃っていく。

が、急所を外していた。

「馬鹿野郎! 殺しもできないなら、女のまま痴漢冤罪でもやってろ。」

「悪い、俺も男だ。ちゃんとやるよ。」

ハルヒは今度はちゃんと頭部を、心臓を狙っていく。

「ヒヤッハー、まるでゾンビゲームだぜ!」

谷口と古泉が機関銃を下劣な輩の群れに撃ちまくる。

キヨン「ゾンビなんかよりよっぽどクズだな、奴等は人の物を取ろうとはしない。」

古泉「善良な市民は逃げてくださいねー。」

先程の少年も武器を持ち、古泉の下に向かってきた。

キヨンがショットガンを少年の頭部に放つ。

幼い少年の頭部が、面白いように吹き飛ぶ。

どんだんクズどもの死体が増えていき、それに比例してクズどもの悪しき心も静まっていった。

武器を持ち、戸惑っている者達に、谷口と古泉が機関銃を撃ち続ける。

逃げ惑う者、銃で負傷し這いつくばって逃げる者も、谷口達は1人残さず撃ち殺していった。

騒ぎが静まると、キヨンが遺体の財布を回収していく。

「ほら、ハルヒ、ぼつとするな、お前も動け。弾代や慰謝料だ。」

「ああ。」

ハルヒもクズどもの遺体から財布を回収していく。

谷口と古泉がしっかりと警戒している。

俺達は大量のユキを車に積み込み、幸福の絶頂のまま兵庫に向けて車を動かしていた。

キヨン宅

キヨン「ふー、やっと帰ってこれた。」

「疲れましたねえ。」

俺達は大量の札束を部屋に運んでいく。

「皆、お疲れ様。お酒や料理の用意はできてるわよ。」

「皆、お疲れによる。」

キヨン「はは、ちゆるやさん、涎が出てますよ。」

みくると長門、ちゆるやさんが出迎える。

帰る前に、ここに呼んでおいたのだ。

利益の配分が終わると、キヨン達は料理や酒に手をつけ始める。

キヨン「えーっと、とりあえず、乾杯！」「乾杯と行きますか。」
谷口「ああ、疲れたけどとりあえず乾杯。」

キヨン「今日は俺等男子の奢りだから、好きなだけやってくれ」
みくる「よっ、伊達男」

長門「感謝感激。」

「スモチ食べさせてもらうによる。男子達、ありがとによる。」

「いやー、ほんと儲かったな。」「ああ、しかしあいつらはほんと
民度が低かったな。」

「本当、人の物を奪ったり、いきなり襲い掛かってくるなんて、同
じ人間だとは思えませんか。」

「大変だったんですねえ。」

「俺ちよつと抜けるな。」

キヨンは金を持ち、居間に行く。

「父さん、母さん、これまだ十分な額じゃないけど。」

両親に札束を渡す。

「お前もただのクズでは終わらないってことか。」

「ああ、このままクズで終わる気はないよ。」

居間に戻るキヨン

キヨンの妹がうにを食べていた。

「あ、キヨン君、このうに美味しいね。」

キヨンは妹の横顔に蹴りを入れる。

幼い妹の体が吹き飛ぶ。

「てめえ、何かつてに食ってんだ。」

キヨンは妹に近づき、子宮を全力で蹴る。

「お前はな、俺の予備なんだよ予備。」

キヨンは木製バットを妹の顔に何度も叩きつける。

子供の頃、妹や皆で野球で遊んでいた頃の事を思い出す。
妹の愛らしい顔が醜く変化していく。

「予備の予備の分際で、勝つてな真似するなよ。」

キヨンは執拗に妹の腹部を蹴り付ける。

「ちよつとキヨン君。私が勧めたのよ。」

みくるが間に入る。

きよんがみくるの胸倉を掴み、持ち上げる。

「てめえ、何かっしてんだコラ。お前等は俺等の稼ぎでこの飯食
ってんだろっが。」

「ごめんなさい。つかれっちゃって。もうしないから、ごめん
なさい。」

みくるが怯えて言う。

「わかりやいいんだよ。」

キヨンがみくるから手を離し、みくるはそのまま地面に落ちる。

キヨンは妹を持ち上げ、階段の方に投げ捨てる。
妹は面白いように階段を転がっていく。

キヨンはそれを見て、多少怒りが和らいだ。

キヨンが部屋に戻ってくる。

「乱暴な奴ですね。」

谷口がみくるに近づき言う。

「いえ、私が悪いんです。かってな真似して。」

部屋

「パソコンが欲しい。」

「パソコン？」

途中省略

部長「んん、しかし。こんな噂流されたくはない。」

部員「こいつらをここで全部殺せば、一番安心です。」

「そうだな。やってしまえ！」

部員が一斉に攻撃を始める。

無防備のみくるが撃ち殺された。

ハルヒ「みくるちゃん？」

次いでか弱い長門も撃ち殺された。

戸惑うハルヒの手を引っ張り、キヨン達は逃げ出す。

「みくるちゃんやユキが。」

「もう助からない。」

「そんな。」

「喧嘩を売るっていうのは、こう言う事だ。」

校内ではSOS団とコンピ部の銃撃戦が繰り広げられていた。
キヨンと古泉がライフルで敵を狙う。

ハルヒは機関銃を持ち、見張りをしていた。

ハルヒ「来た！」

機関銃から放たれた弾丸がキヨン達を狙う。

あわてて逃げだすが、ハルヒはいくらかの負傷をおった。

機関銃を放つ男の頭部が、銃声とともに吹き飛ぶ。

「俺がいないとだめか？」

「谷口。」

「奴等、すぐにここに集まってるぞ。校舎を出た方がいい。」

「そうか。なんとかして校舎を出ないとな。」

ホテル

なんとか逃げてきたキヨン達は、ホテルの一室に身を潜めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5926r/>

ハルヒSS ハルヒ「セックスやってみようぜ」

2011年6月29日17時36分発行